

第7章 子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム in 横浜

1. シンポジウムの概要

テーマ：子どもが豊かに育つとは

日時：平成19年2月1日(木)10時00分～14時00分

場所：横浜ラポール

参加人数：85人

開催目的：乳幼児を持つ親を対象に、家庭で活かしてもらうことをねらいとして、絵本の読み聞かせの楽しさについて学ぶ。また、子どもが生舞台を体験することで、しなやかな感性に働きかけ、イメージの世界を作り、豊かな創造力を育み、主人公の気持ちを理解することの大切さを学ぶ。

タイムスケジュール：

- 10：00 開会
- 10：15～10：45 ワークショップ「とびだせ絵本」
中市 真帆（劇団ひまわり養成所講師）
- 10：45～11：00 休憩
- 11：00～11：45 「絵本の読み聞かせについてのお話」
中市 真帆（劇団ひまわり養成所講師）
- 11：45～12：30 休憩
- 12：30～14：00 講演「アートの力で心をはぐくむ」
講演者 大原 淳司（NPO法人横浜こどものひろば事務局長）
- 14：00 閉会

2. ワークショップ「とびだせ絵本」の主な内容

劇団ひまわり養成所講師であり、ラジオのDJも務めている中市真帆さんが絵本の読み聞かせのワークショップを行った。テーマは「とびだせ絵本」で、対象は0歳から3歳までの未就園児の親子である。

ワークショップの冒頭で「絵本を読んでいる間、子どもたちは騒いでいてもいいんですよ」という説明があった。実際、はじめの方は、騒いだり、走り回ったりする子どもたちがいた。しかし、身振り手振りをまじえ、不思議な雰囲気醸し出しながら、独特の語り口で絵本を読み進めていくうちに、子どもたちは中市さんの方に注目し始める。しばらくすると、子どもたちは、固唾をのんで聞き入るようになり、絵本の世界に引き込まれていった。

読み聞かせの途中に、ちょっとした遊びの要素が取り入れられた。例えば、リズムに合わせて手をたたいたり、輪になって踊ったり、輪の中心に向かって走ったりする活動である。これらによって、場にアクセントが付き、子どもたちの気分メリハリができた。

最後に、「絵本を神棚にあげないでください」という発言があった。これは、絵本を大事に



しまっておくということはないで、破れたり汚れたりするくらい、絵本でいっぱい遊んでくださいという意味である。絵本は、親と子どもがコミュニケーションをとる大切な道具であるというメッセージが深く刻まれた。30分という時間があっという間に過ぎてしまう、子どもも大人も楽しめるワークショップであった。

3. 「絵本の読み聞かせについてのお話」の主な内容

ワークショップに引き続き、中市さんから「絵本の読み聞かせについて」というテーマでミニ講演会があった。

まず、読み聞かせを行うようになったきっかけが語られた。中市さんは、劇団の講師を務めるなかで、子どもを連れてやってくる母親たちの苦悩に気づいたという。それは、子育てのことを誰にも相談できず、1人で全部抱え込み、



いっぱいいっぱいになっている母親たちの姿であった。自分にできることはないかと考え、絵本の読み聞かせをしようと思い立ったという。それは、絵本の読み聞かせに集まってきたお母さんたちと話をするなかで、いろいろな相談にのってあげられるからである。これが、中市さんと絵本との関わりの始まりである。

絵本の読み聞かせを行ううちに、絵本の面白さに気づいていったという。中市さんが感じる絵本の面白さは以下の5点である。

第1に、日常から切り離せる点である。たとえひとときであったとしても、絵本の世界に浸ることで、日常の延長ではないところで楽しむことができる。日常に区切りをつけることができる点が、絵本の良い所である。

第2に、子どもがお母さんを独り占めできる点である。お母さんは、家事など色々なことをしなければならず、子どもとずっと向き合えるわけではない。しかし、少なくとも絵本を読んでもらっているときは、子どもは、お母さんを独り占めでき、お母さんと向き合うことができる。そこが、絵本の素晴らしさである。

第3に、子どもの視点を感じることができる点である。絵本を読むと、子どもは、いろいろなことに気がつく。しかも、それは大人では気づかないような所である。子どもが思いもよらない所に目をつけていることを知ることは、子どもなりの視点を感じることができ、とても面白い。例えば、絵本の定番の『ぐりとぐら』。親も子もセリフを覚えるくらい読み尽くしているのに、ある時、中市さんの娘が、絵本のなかに登場するクマさんが青い花を持っているのに気がついた。絵本のなかで咲いている花は、ほとんどが赤である。けれども、よく見ると、クマさんが登場する前のページに、青い花が咲いている所が1つだけある。つまり、クマさんはそこを通過して、青い花を摘み、「ぐりとぐら」の所にやってきたと想像できるのである。すると、子どもは、クマさんが歩いてきた道や、「ぐりとぐら」が通ってきた道を紙に書き始めたという。ストーリーとは全く関係のないことだが、多くの大人は見落としてしまうであろう所を、子どもは目ざとく見つけ出す。こうした子どもなりの視点を知ることができるところが、絵本の魅力の1つである。

第4に、絵本をもとに表現しあえる点である。絵本は作家の表現物である。しかし、絵や文を、どう受けとめ、どう感じるのかは、読者側の表現である。また、本を選ぶというのも1つの表現である。私はこれを読みたいという表現である。図書館で、子どもが選ぶ本と、お母さ

んが選ぶ本は違う。けれども、違う本を持ち寄るのは大切なことである。それは、持ち寄った本を通して、なぜそれを選んだのかを話すことができるからである。絵本をもとに表現しあえる点が、絵本の楽しさである。

第5に、大人も楽しめる点である。絵本は、子どもの本であるが、ちょっと目線を変えるだけで、大人でも何かを感じさせてくれるメッセージがいっぱい詰まっているものである。絵本は、自分なりの読み方やふれあい方を深めることができるので、大人でも楽しさを追求していく価値のあるものである。

以上が、絵本の面白さである。講演の最後に、「あいしているから」の絵本の読み聞かせが行われた。絵本の魅力を堪能できた「お話」であった。

4. 講演「アートの力で心をはぐくむ」の主な内容

「NPO 法人横浜こどものひろば」事務局長の大原淳司氏が、「アートの力で心をはぐくむ」というテーマで講演を行った。講演の内容は、大別すると「子どもの成長について」と「子どもに『生の舞台』をみせることについて」の2つであった。

まず、「子どもの成長について」では、子どもの現状について語られた。大原氏によれば、いま子どもたちは、人間関係にとっても悩んでいるという。思春期の子どもはもちろんのこと、幼稚園に通う子どもでさえも、悩んでいるという。今の子どもたちは、幼い頃から、人間関係に気を遣い、本当の自分を出さないでいる。その上、精神的に細くなっているから、いったん人間関係でこじれたら、それに耐えることができない。

こうしたことの原因は、子どもの成長過程にある。そもそも、乳児から幼児へと移りゆくときは「人生の夜明け」といわれていて、見るのも聞くのもはじめてなことばかりである。そんなとき、お母さんと共感しながら理解し合っていくことで、子どもたちは感性を育てていくことになる。また、たくさん表現することによって、感性をともなった自我を発達させていくことになる。乳幼児期に、自分が感じたことを表現し、それを受け止めてもらうというコミュニケーション体験を通して、人間に対する信頼や、自己に対する信頼が生まれてくるという。

しかし、今の子どもたちには、表現をすることが不足しているという。表現することを抑圧してしまっているから、ちょっとした人間関係で悩むことになってしまっているのである。こうしたことは、公園での様子からも窺い知ることができる。公園の砂場では、子ども同士がコンタクトをとらせない方向にある。母親たちは、子どもたちが、ケンカをしないように、友だちの目をつつかないように、何かが起こらないように、他の子どもと接触するのを避けてしまう。こうしたことの結果、子どもたちの心が空洞化してしまっているのである。このように、今の子どもに起こっている異変と成長について語られた。

次に、「子どもに『生の舞台』をみせることについて」の報告があった。大原氏は、乳幼児期の子どもに芝居をみせるという試みを続けている。幼い子どもに「生の舞台」をみせるのには理由がある。それは、母親の膝の上に座って芝居をみている子どもが、舞台の動きに反応することで、自分自身を思いきり表現することができるからであり、自分の表現を母親にしっかりと受け止めてもらうことで、母親との絆や信頼感を芽生えさせることができるからである。

ヨーロッパでも、3歳くらいからどんどん芝居をみせている。3歳といえども、ある場面をみて、大人と同じように泣いたり、笑ったりする。3歳でも感じる力や表現する力を持っているのである。もちろん、子どもに芝居をみせても、5分しかもたなかったとか、クマが蜂蜜を

なめるワン・シーンしか興味を示さなかったということもある。しかし、それはそれで良く、むしろ少しでも興味を持って舞台をみたということが大事なのだという。このように、幼い子どもにも表現する機会を与え、人への信頼感を育むために、「生の舞台」をみせることが重要なのである。



ここで、大原氏が最近手がけた「あかいらんごをひとつかく」という舞台を紹介する。それは、次のような作品である。舞台上にセットなど全くなく、フローリングの部屋の壁に、2 畳以上もある大きな白いキャンバスを立てかけてあるだけである。集まった 30~40 人の子どもたちの前に、おじいさんが登場する。そして、真っ白いキャンバスの真ん中に赤いらんごをひとつ描く。おじいさんは、描くのが好きなので、次々とりんごを描いていく。おじいさんのそばにやってきたお兄さんが、絵の進行に合わせてギターを演奏したり、歌ったりして、場を盛り上げていく。そのうち、枝が描かれ、幹が描かれ、葉っぱが描かれる。やがて、大きなりんごの木の絵が完成するという作品である。この作品のコンセプトは、プロセスを共有することである。すなわち、テレビやおもちゃといった、すっかり完成したモノを子どもに与えるのではなく、モノを作り出していく過程を子どもたちと共有することで、何かを感じてもらおうというものである。ちなみに、この作品のエンディングはというと、おじいさんがキャンバスいっぱいにりんごの木を描いたら、最後に本物のりんごが出てきて、それをみんなで分けて食べるというものである。それを通して、「この世は君たちを歓迎しているんだよ」とか、「人間は信頼できるんだよ」とか、「世界は平和なんだよ」ということを伝えるのだという。

講演の最後に、子どもたちの目で見ることの大切さ等について考える『星のおくりもの』というビデオを放映した。「生の舞台」をみることの大切さが伝わる講演であった。

5 . シンポジウムの感想

乳幼児期の子どもにとって親とのコミュニケーションは欠かせないものである。そうしたコミュニケーションの一環として、絵本の読み聞かせや、「生の舞台」をみせるという活動が位置付く。不思議な雰囲気と味のある語り口で絵本を読み聞かせる中市さんと、独特の成長観・演劇観を背景に「生の舞台」をみせる試みを行っている大原氏の講演によって、その面白さが存分に語られた。

なお、参加者から（中市さんのワークを通して）「専門家が語るテープやビデオよりも、お母さんの声で子どもと楽しく（絵本を）読むことがとても大切なこととしました」、（大原氏の講演では）「静かにゆったりと乳幼児の心に届ける劇をぜひ観たいと思いました」等の感想が寄せられた。

子どもにすくすく育ってもらいたいという願いが伝わるシンポジウムであった。